

平成30年10月12日(金)

## 同級生

同級生がたくさんいる。何せ磐城高校第30回卒業生は470人入学したのだから、男ばかり469人が同級生である。

あの頃、入学してから5月の連休明けに数学の実力テストが実施され、点数が5点ぐらいだったのを思い出す。まだ点数があるのはいいほうだった。愕然とした。驚愕して恐れた。

中島敦の「山月記」の中で、主人公が虎になってしまったときに、言ったセリフ通りの気持ちになった。

「自分ははじめ目を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでも見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかったとき、自分は茫然とした。そうして恐れた。まったく、どんなことでも起こりうるのだと思うて、深く恐れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。わからぬ。まったく何事も我々にはわからぬ。」と心の内を吐露する主人公と違うのは、こんなことになったことをおそらく自分はよく知っていることであつた。勉強しないからこうなるのだということです。

しかし、問題はそこにはなかった。自分が5点のテストで足元がぐらぐらいつているとき、100点満点を取ったものがあるという教師の言葉が、頭の後ろからガツンガツンと二の矢を放って頭もグラグラになるのであつた。

あれは、木村君か、中川君か、山野君か、そのあたりの人たちだった。

体中がぐらぐらになって、頭もグラグラになって、もはやどう歩いたかわからぬままに、うちに帰って布団に頭を突っ込んでいた。そこから、再度よみがえるのには、1年を費やした。立ち直りは、現代文からだった。

そんなことから、国語教員になったのかもしれない。

同級生の中で、忘れられない言葉がある。

「俺は470番で卒業したが、社会人になったら社長になって、地域の皆さんに貢献できるようになる。それが、磐城高校を出た俺の誇りだ。」

その人は間違いなく、社長になって地域に貢献している。ゴルフも一番うまいと思う。

同級生それぞれが、卒業してからそれぞれの40年を送ってきた。もう還暦を迎えた人もいる。志半ばで鬼籍に入ってしまった人もいる。病気で苦しんだ人もいる。悠々自適で事業を継続している人もいる。どこにいるかわからない人もいる。

それでも、会うことがあれば、いつも磐城高校生となって会うことができる。当時のいろいろな逸話や出来事を笑いあうことができる。同級生は、いつも磐城高校生となって今の磐城高校を心配してくれる。

どうか、皆さん、そのままでいてください。磐城高校がもう一度甲子園に行ったら、たくさん寄付をお願いします。甲子園でなくても、吹奏楽の全国大会や、ラグビー部、サッカー部、テニス部、陸上部等々全国へは毎年行きますので、寄付はいつでもいくらでも受け付けます。どうぞよろしくをお願いします。